

熊大・東大合同セミナー

「脳神経倫理学を中心とする生命倫理」

- ・ 日時：2009年5月9日(土) 12時30分～18時30分
- ・ 会場：熊本大学くすの木会館レセプションルーム(黒髪北地区)

- ・ 発表題目、発表者(発表時間15分 質疑応答10分)

- 1. 「日本の卵子提供型体外受精・胚移植の生命倫理的問題点の整理分析と医療現場への指針
—法整備に取り組む立法府への提言—」 (児玉正幸 鹿屋体育大学体育学部教授)

- 2. 「マインド・コントロールの脳神経倫理学—ニューロマーケティングと消費者の自律性—」
(小口峰樹 東京大学大学院総合文化研究科博士課程)

- 3. 「歴史的事例に見る脳科学の疑似科学的言説とその社会的影響のパターン
19世紀フランスの骨相学論争とその反対者・賛同者達」
(隠岐さや香 東京大学特任研究員)

- (休憩20分)

- 4. 「エンハンスメント論における健康概念」
(田口周平 熊本大学大学院社会文化科学研究科博士課程)

- 5. 「長期記憶を操作する技術と〈ほんもの〉という理想」
(中澤栄輔 東京大学特認研究員)

- 6. 「意識に上るとは、どういうことか？」 (桑和彦 熊本大学発牛医学研究所准教授)

- (休憩20分)

- 7. 「道徳的判断と動機」 (信原幸弘 東京大学大学院総合文化研究科教授)

- 8. 「自由意志と賭けとしての自己決定」
(高橋隆雄 熊本大学大学院社会文化科学研究科教授)

熊大・東大合同セミナー「脳神経倫理学を中心とする生命倫理」

日時：2009年5月9日(土) 12:30~18:30

会場：熊本大学くすの木会館レセプションルーム

1. 「日本の卵子提供型体外受精・胚移植 (IVF-ET) に対する肯定的所見—法整備に取り組む立法府への提言」 (児玉正幸 鹿屋体育大学体育学部教授)

(発表要旨)

2003年4月以降、国と日産婦が親族や友人からの卵子提供型体外受精・胚移植 (IVF-ET) の実施に否定的見解を示すなか、2009年1月、本邦初の卵子提供型IVF-ETの実施申請と出産という事実が顕在化した。

渦中の人物は、広島ハートクリニックの高橋克彦院長である。日本生殖補助医療標準化機関 (JISART) の理事長を兼務する同院長は、国から生殖補助医療全般の審議を委託された日本学術会議生殖補助医療の在り方検討委員会が2008年4月に対外報告書をまとめて、代理懐胎以外の生殖補助医療問題の全面的審議見送りを決定するや、「ノーというサインはない」と、JISARTから実施申請の理事会承認をとりつけた上で、実施に踏み切り、今回の2組の出産の公表に至った。

「生殖補助医療法」(仮称) が国会で審議されるさなか、高橋院長による卵子提供型IVF-ETの実施申請と出産が既成事実化した現状を踏まえて、卵子提供型IVF-ETに対する肯定的所見を述べる。

「マインド・コントロールの脳神経倫理学—ニューロマーケティングと消費者の自律性—」

小口峰樹

ニューロマーケティングは「市場取引に関連する消費者の行動を分析・理解するための脳科学研究の一応用分野」と定義できます。近年、ニューロマーケティングの成果を広告分析をはじめとした企業の販売戦略に応用しようとする動きが急速に広がっています。それとともに、そうした動向が一種の「マインド・コントロール」につながるのではないかという懸念も生じています。この発表では、ニューロマーケティングの最新事例を紹介するとともに、それらの研究事例に潜むとされる倫理的懸念を、特に「自律性」の問題を中心に検討したい。

無意識的情報の調査分析 Buy boton

従来の方法
depth interview / focus group / loyalty card
Choice blindness / 後付

「ステルス・マーケティング」 サブリミナル広告

*意識のレールに捕獲されない

ブレイク・サイト / 認知心理学 / 国Fプライミング

*「マーケティング」調査における 被験者保護

私企業からの金銭的インセンティブの増加

Self-transcendence

母国語(社会的)保護

母不当な搾取

意識的同意が乏し

コトワナナ

自律性侵害被害の問題

「本意の理由」
「真の欲求」

1階の領域

↓
2階

何故自律か

反省的自律性

歴史的事例に見る脳科学の疑似科学的言説とその社会的影響のパターン
19世紀フランスの骨相学論争とその反対者・賛同者達

隠岐さや香 (東京大学特任研究員)

科学史 (科学の社会史)

フランツ・ガル (1758-1828) の提唱した「骨相学」は十九世紀初頭、脳の科学を掲げながらも大きな社会問題を引き起こした「失敗例」の一つとして知られ、脳神経倫理においても言及される。その際に関心を集めてきたのは、何故人々 (専門家も含む) がそのような疑似科学的言説を安易に「信じてしまった」のか、という問いであった。そしてガルには他の「まともな」科学的業績があったこと、当時一流の科学者がガルを支持していたことなどが主な要因として指摘されてきた。

本発表ではこの事例をより社会的な角度から考察することを試みる。すなわち、骨相学の問題を疑似科学の一例としてのみ考察するのではなく、「脳科学的知識の普及過程で起こりうる社会的影響」の歴史的な事例として扱ってみる。その上で、今日の脳科学が俗流科学という形で社会に与えている、もしくは与えうる影響についての脳神経倫理的議論との比較が可能かを検討する。

脳という人間の精神の基盤に関わる対象は、不可避に、当該社会の宗教的・文化的な価値観、そしてそれらを支える諸制度と複雑に絡み合った政治・教育的関心を引き起こす。歴史的経緯を詳細に見ると、骨相学に対する人々の反応には、いわゆる「騙された・騙されなかった」人々のみならず、「科学的真偽は理解できないが政治的・宗教的信条から拒絶した人々」、逆に「真偽はともかく都合がよいので利用しようとした人々」など、今日感覚でも理解可能な様々な立場が存在していた。また、同時代人の示唆によればガル自身は一般向けの「骨相学」演説や普及書と、専門家に向けた自らの解剖学的論文とを区別して扱っていたふしがある。これは今日の科学者が「一般向け」にかみ砕いた説明をしすぎた結果、メディアに俗説が流布する状況と比較可能な現象とは言えないだろうか。そして、俗説が社会に影響力を与える度合いは、知識の媒介となる人々の知的態度、各種専門家による情報の制御、情報伝達メディアのあり方など様々な要因に左右される。例えば、科学の専門化・制度化が進んでいたフランスでは英国ほど骨相学の社会的影響が顕著でなかったという説もある。

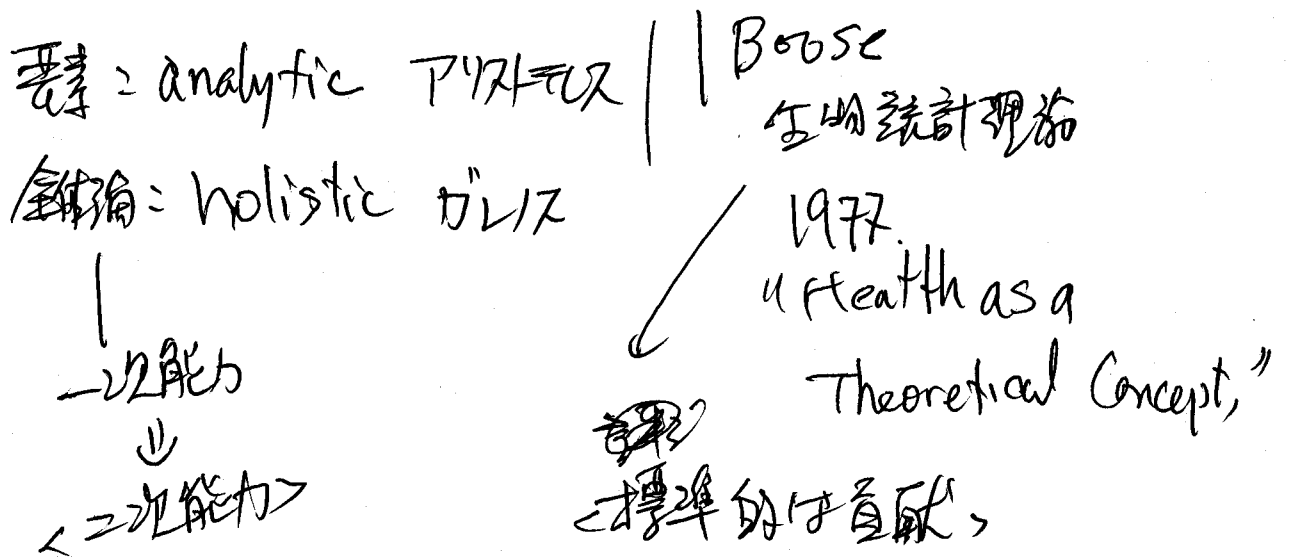
十九世紀初頭の英仏社会は現代と異なる点も多い。しかしながら、その違いを踏まえた上での歴史的な分析が、我々の社会での問題に別の角度からの理解や示唆を提供することもあろう。

<100年前> ガル: 科学コミュニケーション

- 脳は心の器官
- 心も脳も統一的身体ではない
- 器官の大きさで働きが強い
- 骨を測ることによってわかる

- 科学: アナトミ
- 政治: 科学弾圧 (批判)
- 学校: 唯理論の普及
- 思想: 局在/年得説
→ 科学の可及
- 一般: 信憑者
→ 科学/改革
→ 科学/犯罪学

エンハンスメントの一般的定義として、健康の維持や回復に必要とされる以上に人間の形態や機能を改善することを目指した介入(Eric T Juengst, 'Enhancement Uses of Medical Technology' Stephen G. Post ed. *Encyclopedia of Bioethics 3rd ed.*, Macmillan Reference, New York, 2004, pp.753-757.)。この健康という概念はエンハンスメントにおいてほとんどの定義に含まれているものである。その健康概念を見ることは、エンハンスメントの倫理的正当性に関わらないが、議論する上で重要なエンハンスメント自身について理解するために必要である。以下では、その取り組みの一步として、健康概念を大まかに捉えたい。健康概念は、要素論的にも全体論的にも捉えられるが、ここでは特に代表的な論者として、要素論として Boose の生物統計理論、そして全体論として Nordenfelt の健康のウェルフェア理論を取り上げたい。



長期記憶を操作する技術と〈ほんもの〉という理想

東京大学総合文化研究科
グローバルCOE

「共生のための国際哲学教育研究センター」

特任研究員
中澤栄輔

概要

〈ほんもの Authenticity〉は「よく生きること Well-being」の中核的概念と考えられている。〈ほんもの〉とは、より卓越した人間性を目指して絶えず繰り返される自己実現の活動それ自身とそれを為している主体のアイデンティティに備わっている価値であるが、本質的にその自己実現の活動と目指されている卓越した人間性は手段と目的の両面にかんして他者の承認を必要としている、そういった価値である。しかしながら、〈ほんもの〉をこのように定義してみたところで〈ほんもの〉はなおも捉えがたい概念であると言える。というのも、自尊心やアイデンティティといった関連する諸概念と〈ほんもの〉との関係は明確ではないし、〈ほんもの〉の定義も完全に同意されているとはいえないからである。

それにもかかわらず、〈ほんもの〉は脳神経倫理学、とりわけエンハンスメントをめぐる議論のなかでしばしば言及されている。プロプラノロールのようなベータ阻害薬やLTPの保持にかかわる酵素であるPKM ζ の阻害剤によって長期記憶に介入すること、とりわけエンハンスメント目的で長期記憶を変化あるいは消去させようとする技術にかんしては安全性、医療化、記憶保存の社会的要請などと並んで、〈ほんもの〉、人格同一性といった観点から倫理的問題が提起されている。しかしながら、〈ほんもの〉概念が定まっていな以上、そこで交わされる議論はしばしば混乱してしまう。

そこで本発表では、〈ほんもの〉概念を再検討しながら、記憶を消去・変更する技術がもたらす倫理的影響を論じる。とりわけ、〈ほんもの〉概念と人格同一性との関係を明確にして、議論の基盤を形づくる概念マップを描くことに力を注いで、記憶の脳神経倫理学の基盤を提供することを目指す。

・ 記憶の強化の欲望

→ 有利 /

・ 方入りが/条件づけ

神経科学 / 学理的介入

・ 生き方によって決まる (Elliott)

・ 強迫の欲望

・ 修得 / 条件づけ

・ 学理的介入

↓
Is it safe?

・ 都合の悪い記憶を
医学的に消去することは

〈ほんもの〉という理想に背馳する

・ Prozacによる鬱状態を克服することは、〈ほんもの〉の理想に背馳する

エドワード・テイラー論争中

數的(人)と質的(人)の同一性 - 區別の存在

Authenticity = DeGrazia

(Bolt) → Taylor

- 自己実現
- 平行進行
- 他者への承認

2つの「人」同一

交感) a 連続性
身体

≠ 認人類
人肉

意識に上るとは、どういうことか？

熊本大学発生医学研究所 桑 和彦

脳科学の進歩は、特に「意識」と「無意識」の問題を通じて、「心」に対する見方への影響を与えている。特に「リベットの実験」に対して、私たちが意志決定を「意識」する前に、脳が既に意志決定をしているという解釈がなされ、私たちには自由意志がないという議論もされる。実際、私たちが統合された自己があると感じている時、内部情報・外部情報の多くが意識化されていない（例：カクテルパーティ効果）。しかし、意識化されていない情報も、意志決定には重要な役割を果たす（例：暗黙知）。この意識化されない部分＝前意識的＝サブリミナルな部分では、認知的情報以上に、情動的情報の果たす役割が大きいと考えられ、さらに、この情動的情報（または、単に情動）は、意識化することが難しい。今回は、「前意識的情報」が「意識」に上るとは、実際にはどのようなことを意味し、その結果が、私たちの意志決定と「自由」と、どのような関係になるのかを考えてみたい。

信原幸弘「道徳的判断と動機」の発表要旨

ある行為をすべきだという道徳的判断にはその行為をしようという動機が内在するという動機内在主義に対して、ロスキースは、VMPFC（腹内側前頭前皮質）損傷患者が道徳的判断を行うにもかかわらず動機を欠くとして、批判を展開する。ロスキースは動機内在主義を支える神経モデルとして、道徳的判断に含まれる道徳的事実の認識面を実現する神経基盤と動機面を実現する神経基盤が不可分であるようなモデルを想定する。これに対して田口は、道徳的判断の神経基盤が認識面の神経基盤と動機面の神経基盤の両方を含んでいればよく、これらが不可分である必要はないと反論する。しかし、動機内在主義は道徳的認識がそれ自体として動機付けの力をもつという立場のはずである。従って、内在主義の想定する道徳的判断は記述面と指令面を兼備した単一の心的状態であり、マクダウエルの欲求内包的な世界把握やミリカンのオシツオサレツ表象の一種と考えられる。そうだとすれば、内在主義を支える神経モデルは、認識面を実現する神経基盤と動機面を実現する神経基盤が不可分であるようなモデルでなければならない。人間においてそのような神経モデルが実装されているかどうかは経験的な問題である。また、ハイブリッドの可能性、すなわち内在主義的な神経モデルと外在主義的な神経モデルの両方が人間の脳に実装されている可能性もある。

1. ロスキースの内在主義批判

マクダウエル ~~欲求~~ 欲求内包的 世界把握

ミリカンのオシツオサレツ表象

認知主義 vs. 非認知主義

<道徳的判断>

信念と行為の命令:

ヒューム主義の挑戦

[信念はそれ自体が動機付け
欲求だけ]

(信念が 欲求を内在)

<欲求内包的
命令>

人を助けることはよいと判断しおのづから
人を助ける動機はまたおのづから

<UMPFC> 損傷 ↑

Dスペース

道德観 ≡ 動機

道德観

田口モナ

不修

道德観 ≠ 動機

0 マクガウエ

欲求内容的な状況把握 / 力

(アリステリス)

徳のある人になるのは難しい。

0 三ツカ

オシロイオシロイ 表裏

記述面と指示面を兼ねた単一の表裏

欲求と欲求

恐怖

危険を記述する / 逃避を指示する

<オシロイの下オシロイ> 近接性
行動面

別の回路を使っている

善人的かどうか?

ハイブリッドの可能性

- ・視覚 / 音側 / 嗅側
- ・微動的環境 / 意識的環境

内在型
 乙
 外在型]

相対性型
 ↳

直観能力

今回の発表は、昨年の12月に東大の信原研究室で行った発表をもう一步展開したものである。まず、脳神経科学による自由意志の否定の試みと、脳神経技術の適用によるニューロエンハンスメント問題の合流点に見えるものとして、人間の機械化、偶然性の排除が挙げられる。そうした事態への対応としては、大雑把には次の3通りが考えられる。(1) 倫理の脳神経科学において自由意志擁護の立場をとる。また、脳神経科学の倫理でエンハンスメント批判等の立場をとる。(2) 決定論を受容しつつ、人間の機械化、偶然性の排除でない道を探る。(3) 人間の機械化の方向を擁護する。今日の話はBの方向にある。その際に、九鬼周造『偶然性の問題』での偶然性や必然性概念の考察を参考にしてみる。九鬼は、偶然性に関する種々の形式論理的枠組みのスコラ的ともいえる考察をするが、それとともに、そうした枠組みが日常世界や哲学の言説の基盤にあることを示す。さらに、その枠組みを前提として、それを駆使しつつ、偶然性が我々の生、実存においてもつ意味の解明をめざす。こうした考察を踏まえて、賭けとしての自己決定を捉えることの意義を考えてみたい。賭けとして行為を捉えるのは、偶然性自体を肯定する点は九鬼と同様であるが、目的必然の場合として行為を捉える九鬼の立場とは異なる。九鬼では、目的必然→目的偶然→因果的偶然→複数の因果系列による必然→原始偶然→運命として受容、という過程を辿る。賭けとしての自己決定の立場では、行為は目的偶然を本質にもつ。現実の行為は偶然性の中にあり、目的必然は意図の中にあるにすぎない。賭けの要素の帰結として、結果の受容。また、行為者による学習、さらには、賭けのように、行為そのものがある種の完結性をもつことになる。ここからは、行為すること自体に価値があること、生きること自体に喜びがあることが帰結すると思われる。そして、偶然を排除せず、自由意志を認めるこのような立場はまた、決定論とも両立可能である。

自由意志に両立論 → 形而上学的不安

コトク 共時性

親らの行為論 = 全部信じるか?

不安

救わぬ

往生

しようと思っても

用一甲 (必然性)

セシテハシ

定言的 / 仮言的 / 懸持的

< 偶然性の否定 > 他者でもありえた我

< 運命論 > 原始偶然であり 形而上学的必然
 理性的計算 超える